

パリ郊外における移民系住民の差異化戦略 ——領土的スティグマと地区におけるモラルヒエラルキー——

一橋大学大学院・日本学術振興会特別研究員 村上 一基

1. 目的

本報告の目的は、移民の集住する地区において、移民系住民がどのように同じ地区に住む他の移民系住民を批判し、差異化しようとするのかをパリ郊外の2つの地区の比較から明らかにすることである。

フランスにおいて、1980年代以降、都市部郊外の大衆地区は、社会的排除やセグレーション、ゲットー化、移民問題などと関連する主要な社会問題のひとつをなしてきた。こうした地区は社会関係が発達しづらい「不可能なコミュニティ」(Wacquant 2008)や「裏返しのコミュニティ」(Lapeyronnie 2008)である。ここでは地区特有のモラルヒエラルキーや外部からのスティグマの他者への転嫁、地区の生活から距離をとることなど住民間の差異化の実践が見られる。先行研究では、地域における居住歴や社会階級に基づく差異化、フランス人と外国人の対立などが明らかにされてきた。本報告では、マグレブ諸国や西アフリカ諸国出身の移民を背景に持つ人びとの関係性に焦点をあて、社会から否定的なまなざしを与えられてきた人びとが他者にそのまなざしを転嫁するプロセスを明らかにする。

2. 方法

本報告では、2010年10月から2013年3月まで、パリ郊外の移民を背景に持つ人びとが集住する2つの地区で行った調査結果を用いる。調査では中学生以上の子どもを持つ親、地区で育った若者、中学校の教職員、教育の分野で活動するアソシエーションや自治体職員、計162名に対してインタビューを行った。また人びとの生きられた経験を理解するために民族誌調査もそれぞれの地区で実施した。

3. 結果

地区の生活に関して人びとはお互いに知り合いであることを強調する一方で、同時に他の住民と一定の距離を保ち、かれらと同一化されることを拒否する。調査の結果から、経済的に貧しい人びとに対する批判は見られず、他者に対する批判はモラルの側面に向けられていることが明らかとなった。特に移民系住民の間では子どもを放任しているといった教育に関することや、エスニック・コミュニティへ閉じこもり、他の住民と接触しないこと(「共同体主義(Communautarisme)」)に関する「相互の」批判が見られた。だがこれは特定の集団間の対立ではなく、個人が「自分は違う」として、他の移民系住民やエスニック集団を批判する個別的な差異化の実践であった。

こうした差異化の実践は世代間で異なった形態を見せ、地区で育った若者はローカルなアイデンティティを通じて、お互いにより強いつながりを感じていた。また2つの地区の比較から、人びとの地区への居住プロセスによって、それぞれのエスニック集団間の関係性は異なることが明らかとなった。

4. 結論

人びとはスティグマ化された地区の住民であることや、社会から否定的なまなざしに曝されている移民(特にムスリム)であることを強く内面化している。地区におけるモラルヒエラルキーはこのような外部から与えられるスティグマと密接に関係しており、人びとは他者を作り出し、社会から与えられた否定的なまなざしをその他者に転嫁することによって、自分たちの自尊心を高めようとしている。

文献

Lapeyronnie, D., 2008, *Ghetto urbain: ségrégation, violence, pauvreté en France aujourd'hui*, Paris: Robert Laffont.
Wacquant, L., 2008, *Urban outcasts: a comparative sociology of advanced marginality*, Cambridge: Polity.